



空手 全国大会出場

7月3日、市立宇谷小学校4年生の吉福啓さん=写真左=と市立東小学校1年生の萬岡妃瑠さん=写真右=が市役所を訪れ、8月に東京で行われる全国大会への出場を北川市長に報告しました。

全国大会に向けて、吉福さんは「優勝するため、更に練習を頑張りたい」、萬岡さんは「思いっきり頑張ります」とそれぞれ気合い十分でした。



マーメイドジャパンを激励

世界水泳選手権大会に出場するシンクロナイズドスイミングの日本代表チームを、北川市長が訪問、激励しました。

代表チームは大阪での合宿中、市内に宿舎を構えていました。本番を目前に控え、連日ハードな練習が続く中でしたが、皆さん笑顔で抱負を語ってくれました。

井村ヘッドコーチは「力を出し切り、一つでも上の結果を目指したい」と力強く話しました。



女子ソフトボール 全国大会出場

7月3日、女子ソフトボールチーム「Oops」の皆さんが市役所を訪れ、9月に埼玉県で行われる第22回全日本レディースソフトボール大会への出場を北川市長に報告しました。

「Oops」は、府予選会を勝ち上がり、全国大会への出場を決めました。出場に当たって、「チーム一丸となって、勝利を目指します」と、大会に向けての意気込みを語っていました。



鬼ぐるみの実が膨らみ始めました

点野の淀川河川敷

羽のような大きな葉の間から、細かい毛におおわれた直径2センチメートル～3センチメートルの実の房のぞいています。

市自然を学ぶ会によると河川敷に点々と自生し、4月～5月には先端が真っ赤な雌花も目立ちます。殻は普通のくるみ以上に堅いのですが、秋には熟して食べられるようになります。





街角に鮮やか

木田町の民家の塀に「おはよう」「今日もがんばろう」といった文字やアニメのキャラクター、動物、魚をあしらった色鮮やかな針金工作がびっしり飾られています。保育園の子どもたちが読み上げながら通ったり、近所の人が道案内の目印にしたり、親しまれています。

住人の男性が5、6年前、孫を喜ばせようと作り始めたそうです。本の絵や写真をモデルに思いつくまま作り、本人もいくつあるか見当もつかないとか。「近所の皆さんにも楽しんでもらっているようなのでうれしい」と笑顔でした。



青年海外協力隊としてモンゴル国へ

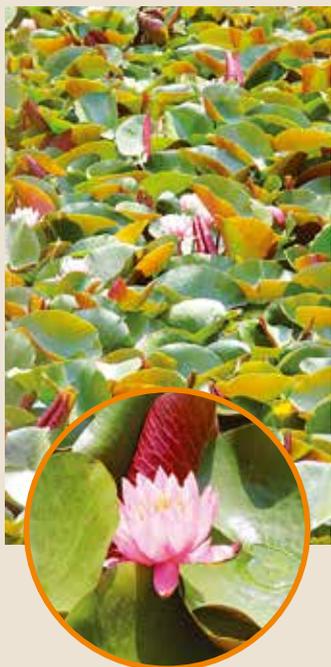
6月16日、箭木慎太郎さん（堀溝）が市役所を訪れ、7月から青年海外協力隊としてモンゴル国で理科教育を行うことを北川市長に報告しました。

箭木さんは府立香里丘高校で理科の教師として働いていて、異文化で生活する人々と交流することで更に成長したいと考え応募したとのこと。「教育を通じて、日本とモンゴルの架け橋になりたい」と熱く語りました。



ねやがわ

~花便り~



太秦2号公園のすいれんの花

太秦2号公園の山新池で、すいれんの花が咲いていました。毎朝、直径15センチメートル程のピンクの花が開き、昼頃には閉じるのを数日間、繰り返します。水面に広がる艶やかな緑の葉の間から、気品のある花が顔をのぞかせ、涼しげでした。

近くの人々は「この季節、毎朝の楽しみです」と言い、8月まで続くそうです。



全国高等学校総合文化祭 (将棋部門) 出場

7月4日、里田熙さん（大阪電気通信大学高校1年生）が市役所を訪れ、6月11日に行われた府中・高等学校将棋選手権大会高校男子団体戦で優勝し、8月3日から宮城県で行われる全国大会に出場することを北川市長に報告しました。

里田さんは決勝戦で相手校の上級生を打ち破り、優勝に貢献しました。府大会で自信を深めた里田さんは、「日本一を目指します」と張り切っていました。

成田幼稚園はその後、近くの市道を渡った東側に移転し、跡地は広大な駐車場になりました。成田山は車の交通安全祈願で知られ、全国で初めての専用祈禱殿には各地から多数の車が集まってきます。年末年始、節分の頃には、広い駐車場が車で埋まりません（撮影地…成田西町）。

いま

平成29年6月

ねやがわ
写真館



62
年後



昭和30年頃

むかし

成田西町の本落正子さん提供の写真を使用しました。30年以上前の市内の光景写真を貸していただける人は広報広聴課まで連絡してください。

成田山不動尊が昭和26年に開設した成田幼稚園の運動会の様子です。帽子に大きなウサギの耳を付けて、園児たちが仲良く行進しています。見守るお母さんたちの多くは着物姿で、時代を感じます。中央奥のバスの向こうに見えるのは、成田山の山門です。



ふるさと

ねやがわ

「音楽の盛んな街に」

右手だけで弾くピアニスト 樋上 眞生さん



樋上眞生さん（33歳） 豊野町は、世界でもまれな右手のピアノニストの道歩んでいきます。演奏中、左手の指が思うように動かなくなるジストニアという、演奏家生命にかかわる症状が契機でした。右手だけで弾くようになり、一度に鳴らす音が少なくなったことでシンプルに音楽に相対するという新たな可能性も感じ、「ハンディとは思っていません」と語ります。

京都市立芸術大学を卒業し、オーストリア留学などを経て、数々のコンクールやリサイタルで活躍していた平成26年春。日本人として初めて

ロシアの作曲家、リャプノフの作品をCD収録するため練習を重ねていたとき、左手の人差し指に症状が出始めました。さらに根を詰めて練習し、録音を乗り切りましたが、症状が悪化しました。複数の医療機関でいろいろな診断を受け、ジストニアと確定するまで半年掛かりました。

ジストニアは神経系統の働きに異状が起き、本人の意思に反して体が動く症状です。音楽家の場合、不断の反復練習が原因になるといわれ、確実に治る治療法はまだ見つからないのが現状です。

樋上さんにとっても、たゆみない練習は欠かせないものでした。左人差し指を使わない9本指の演奏を試みたものの、元のように自在には弾けませんでした。複数の治療を試みながら悩んだ果てに約1年後、ジストニアと向き合い、右手のピアニストとして生きる決意をしました。

ただ、クラシックの世界では左手のピアニストとして活躍している人は数多く、左手の名曲もあるのに、なぜか右手の演奏家は知られていません。選んだ道は先人の見当たらないものでした。

いものでした。

樋上さんによると、左手の曲を右手で演奏することは可能ですが、自分が表現したい曲ばかりではありません。演奏時、右足でペダルの操作をするため、バランスが右に偏って体力の消耗も激しいといいます。

それでも、「ピアニストをやっていく以外、考えられませんでした」と振り返ります。昨年12月、右手のピアニストとして初のリサイタルを東京で開催するなど各地での演奏会に加え、ロシアのラフマニノフの作品など自分のスタイルに合ったピアノ曲を右手向けに編曲する活動を続けています。まだレパートリーは十分ではないといい、全て自ら編曲した右手曲で構成したりリサイタルを開くのが目標です。

「生まれも育ちも寝屋川。この街が大好き」という樋上さん。音響が工夫された市のアルカスホールが平成23年に開館した際、記念行事で演奏を披露したこともあり、「音楽の盛んな街として発展してほしい」と願っています。

